
戦場の狙撃手

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の狙撃手

【Nコード】

N1675M

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

「それでは試合を開始する。第十小队は守り、第十七小队は攻めだ。各隊員は速やかに配置に付くように」
シ
ヤーニッド視点で進みます。

（前書き）

シャーニッド視点ですが、レイフォンがやたらと活躍します。

「それでは試合を開始する。第五小隊は守り、第十七小隊は攻めだ。各隊員は速やかに配置に付くように」

今日は第五小隊と第十七小隊の練習試合だ。練習であって対抗ではない為、勝ち負けが戦績に響く事は無い。もちろん、勝てば士気は上がるし負けても自分の隊の弱点などが分かるので決して無駄ではない。

「今回はこちらが攻めだ。相手のフラッグを取るか相手指揮官を倒せば我々の勝ち。そして、私が倒されるか、時間切れになれば相手の勝ちだ」

真剣な表情でそう話すのは第十七小隊のリーダーである武芸科3年のニーナ・アントーク。

「俺はどうすればいいんだ？フラッグを狙うのか、それとも相手を狙うのか」

質問したのはこの隊の狙撃手である武芸科4年のシャーニッド・エリプトン。

「そうだな、今回シャーニッドにはフラッグを狙ってもらう。レイフォン、シャーニッドからの援護は無いと思っておけ」

「分かりました」

「りょーかい」

ビイイイイイイイイイ!

甲高い機械音が試合開始の時を告げる。

「レストレーション」

軽金^{リチウムダイト}錬金鋼に剄を流す。すると錬金鋼^{ダイト}はその質量、形を変え狙撃銃になる。

「さてと、まずは隠れる場所探しだな」

殺剄を使いながら走る。

(前方二十キルメルの所に罠を確認。迂回するようにして回避してください)

「サンキュー。フェリちゃん」

その時少し遠くで怒号と爆音が響いた。レイフォン&ニーナと第五小隊のアッকার、ゴルネオ&シャンテが交戦にはいったのだろう。つまりはそれだけシャーニッドが狙われる確立が減る。

「そろそろ俺も頑張るとするか」

手短な樹に飛び乗る。殺剄を使い、なるべく音を立てないようにしながら進む。

「おっ、ビンゴ。いい場所見つけたぜ」

シャーニッドが見つけた場所は丁度、レイフォン達が戦う場所が見え、尚且つフラッグもギリギリ射程圏内に入る場所だった。

「ニーナ、こっちは場所の確保終わったぜ。自分から動かなきゃ見つかる心配はないな。ただ、少しフラッグから少し遠い。俺はしばらく様子見させてもらうかな」

（分かった。隙があり次第フラッグを狙撃してくれ）

狙撃手は待つ事が仕事だ。焦って撃つてもまず当たらないし、当たったとしても致命傷にはならない。それに、こちらの居場所がばれてしまう。

「つつても、何か暇だなー」

レイフォン達とゴルネオ達の戦いはまだ続いている。レイフォンがその気になれば何処の小隊でも簡単にねじ伏せる事が出来る。しかしそれをしてはそもそも試合にすらならないのでレイフォンは普段実力をかなり抑えて戦っている。

（シャーニッド先輩）

そのレイフォンが声をかけてきた。ゴルネオと闘っているのだ。

「んーなんだレイフォン。つかそんな事してる暇あんの？相手はツエルニのトップクラスの武芸者なのによ」

（え、あ、はい。まあ少しは。ゴルネオは確かにツエルニでは強いですがちよつとは危ないけど、じゃなくて、シャーニッド先輩

退屈じゃないですか？)

ちよつとかよ。レイフォンに内心で突っ込みをいれる。ゴルネオと戦っている最中に日常となんら変わらない調子で喋るなんて芸当自分なら到底できない。

まっでもアイツなら出来んだろうな。

一人で強大な老生体相手に丸1日、傷ひとつ負うことなく戦うなんてことが出来るような実力なのだから。

「あん？退屈かって聞かれりやまあ、少しはな。でもそがどうしたんだ？」

(いや、隊長が「シャーニッドは今頃退屈でアクビでもしてるだろうな」言ってたので)

そんな風に思われてんのかよ俺って。まあ実際のところもう少いでアクビはでそうだったが。

レイフォンの言葉が続く。

(撃つなら撃つて良いですよ。何処から撃ったか分からない様に僕がフォローしますから)

「んな事も出来んのかよ。未恐ろしい奴だな。でもまっ、退屈してた事は確かだしお前を信じて撃たせてもらっぜ」

剣を錬金鋼ダイトに送り込み引き金を引く。試合用の麻痺弾が空気を切り裂き、今まさに二ーナに攻撃を加えようとしていた第五小隊の一

人の横腹に突き刺さる。突然隊員が倒れた事に驚いてゴルネオがこちらを見る。がその前にもう一人のレイフォンがシャーニッドとゴルネオの間に入り込み衝剄の雨を降らせる。

「おいおいマジかよ・・・」

驚きの声をあげる。あんな芸当が出来たということはレイフォンはとつくにシャーニッドの位置が分かっていたという事だ。そしてあの技は・・・。

初めての第五小隊戦でも見せた技だ。後でレイフォンに聞くと『千人衝』と言っていた。

千人衝。ルッケンスの秘奥。レイフォンは100人程に増えている。これでは隊の上限人数7人は何の意味も無い。思わず指が引き金を引いてしまった。流石に2度撃てば気づかれる。そう考え移動しようと腰を浮かした時さらにとんでもない事が起こった。

元々、シャーニッドの放った弾丸は誰にも当たらないコースを飛んでいた。当たり前だ、そもそもねらってすらないのだから。当たらなくても飛んできた軌道でシャーニッドの位置がバレてしまうが、百数人の内のレイフォンの一人がシャーニッドの放った弾丸を、サファイアタイト手にした青石鍊金鋼で弾き飛ばした。

「はあ？いくらなんでも無茶苦茶じゃね」

弾丸を剣で弾けば当然その弾丸が打ち消される。だがレイフォンが撃ち飛ばした弾丸はそのままの勢い、いやむしろ早くなって別方向へと飛んでいった。

ハーレイの調整の腕はかなり良く、撃った時の音がほとんどない。音も無く弾も無ければ見つかることは無い。本来なら撃つ時に込める少量の剄でも相手の念威繰者に感づかれるが今はそこから中にレイフォンの巨大な剄がある。この中でシャーニッドが少し剄を使ったところでソレを察知できるのはフェリくらいなものだろう。

そう考えた。しかしそれだけでは終わらなかった。レイフォンが弾いた弾丸をまた別のレイフォンが弾く。

試しにシャーニッドは適当に幾つかの弾を放った。それら全てをどれかのレイフォンが捉え、弾く。

複数の弾丸が同時に、別方向から飛んでくるなんて想像できる訳がない。こちらの狙撃手はシャーニッド一人なのだから。そう思っている第五小隊の隊員に2つの弾が同時に、別方向から襲い掛かる。

さらにシャーニッドは弾丸を放つ。そのことごとくをレイフォンが拾い2発以上の弾を第五小隊に浴びせる。

ついに副隊長であるシャンテが3発同時に食らって吹き飛ぶ。

レイフォンが弾き合っている弾丸の数は10数発ほど。その内の一つがフラッグに向かって飛んでいく。

「おっと、美味しいトコは先輩に譲るべきだぜ」

シャーニッドが言葉と同時に放った弾は空中でレイフォンの放った弾に当たり小さな爆発を起こす。さらにシャーニッドは今度は自分がフラッグに向かって引き金を引く。それに合わせるかのようにレイフォンが全ての弾丸をゴルネオに向かって放つ。

シャーニツドの放った弾がフラッグを打ち抜くのと、10数発の麻痺弾に襲われたゴルネオが倒れたのは殆んど同時だった。

ビイイイイイイイイイイ!

試合終了の音が鳴り響く。

試合が終わった後、シャーニツドが「最終的に全部俺の撃った弾で倒したんだから今回は俺一人で倒したようなもんだな。」ワハハハハハハ、と自慢していたが十七小隊の誰もがその言葉を無視して帰った。

（後書き）

誤字、脱字、批判があれば言ってください。

それで、もしよければ評価や感想をください。

僕のヤル気が上がりますのでw w

つーか展開が速い気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1675m/>

戦場の狙撃手

2010年10月9日01時33分発行